

第三十回記念号に寄せて

—— 国語の横書きは国体素乱なり ——

古田島洋介

本誌も節目の第三十号を迎へるに至つた。第一〜十八号は「青梅校」日本文化学部言語文化学科として、第十九〜三十号は「日野校」人文学部日本文化学科としての発刊である。平成五年（一九九三）三月刊行の第一号より足かけ三十年、齡よほひつひに而立じりつに達したわけだ。まづは毎年度末一回の刊行を間断なく果たしてきた慶びを関係各位と共にしたい。

第二十号以来、本学科の人員には些少の波が生じた。平成二十五年（二〇一三）三月末を以て上原麻有子が退職、京都大学へ転出した。また、同二十六年（二〇一四）十一月には、病を得てゐた三橋正が薬石効なく天逝、これは教員のみならず、学生たちにとつても大きな衝撃であつた。その後、兩名に代はつて同二十六年（二〇一四）四月より向後恵里子が、同二十九年（二〇一七）四月より芳澤元が学科教員に名を列ね、幸ひ総勢十名の教学態勢は維持してゐる。柴田雅生・田村良平・勝又基・青山英正・内海敦子の面々が旧に変はらぬ熱意を以て研究に精勵してゐるのは、何よりも頼もしいことだ。今後、数年のあひだに服部裕・前田雅之そして私が定年退職を迎へるとはいへ、「自らの研究を基盤として授業を行ふ」といふ本学科の基本方針は、将来にわたつて保ち続けてもらへるものと思ふ。勤務先でのみ、いや、教室においてのみ「先

生」として通用するにすぎない不埒ふちち者が本学科に席を占めるやうなことがあつてはなるまい。

それにしても、創刊第一号から今次第三十号に至るまで、本誌が一貫して縦書きを基本としてゐることには、少なからぬ感慨を覚える。もし執筆者が横書きを希望すれば、それはそれで拒みはしない。しかし、本誌の基本的な体裁を横書きに変更せんとする意見が本学科教員から持ち出されたことは、今日このときまで一度もなかつた。これは目立たぬことながら慶賀すべき一事と考へる。

多少とも日本語の問題に関はる機会があれば、誰しも『国語学大辞典』（東京堂、一九八〇年）の恩恵を蒙つた経験があるだらう。かく言ふ私も例外ではない。その『国語学大辞典』が三十餘年ぶりに改訂され、『日本語学大辞典』（同、二〇一八年）と名を改めて新生するとの報に接し、学科図書室に配置して学生諸君の便にも供すべく、ただちに発注に及んだ。ところが、配架が完了したといふので、いざ手に取つてみると驚くなかれ、横書きの左右二段組み。強い衝撃を覚えるとともに甚だ不安になつて、すぐさま「返り点」項を検してみた。何と云はるか案の定と言ふべきか、碩学たる小林芳規氏の執筆に係る同項も横書き、レ点の位置に関する歴史の変遷の説明が「ルビ「ルビ」ルビ」ではなく「ルビ」ルビ」だ。あまりに手前勝手な体裁ではないか。「国語学」を「日本語学」と改称したのは、まだしもとしよう。けれども、だからといって横書きに改める必要がどこにあるだらうか。国語の体裁を乱すといふ意味で、これでは国体素乱の譏りを免れないのではないか。

近時これと同じ衝撃を受けたのは、小田勝『読解のための古典文法教室』（和泉書院、二〇一八年）である。久しぶりに文語文法を復習し、

改めて知識を固めておかうと思ひ立つたところ、この小田氏の一書は書名に「大学生・古典愛好家へ贈る」との字句が冠せられてゐたので、素人には百人力と勢ひ込んで発注・購入した。ところが、現物を開いてみると、わあ、横書きではないか。もしかすると英訳などと比較する便宜上、敢へて横書きにしたのかと思つてページをめくつてみたが、どうやらさうではないやうだ。内容は期待どほりの充実ぶり、精緻な記述に教へられるところ少なからず、ひたすら感謝の二字なのだが、和歌や『源氏物語』を横書きで読まされる違和感だけは、どうにも拭ひがたい。

事 横書きに及べば、看過すすわけにゆかぬのが、いかにも軽薄な横書き《聖書》(新共同訳 ハンディバイブル、二〇一二年)である。もとより口語体の《聖書》など有り難くも何ともないが、加へて横書きとなると、もはや何をか言はんやだ。『マタイ伝福音書』五〇七の「山上の垂訓」で繰り返される文語訳「我は汝らに告ぐ」が横倒しの口語訳「サ・ヒ・コ・ヲ・訓・ム・コト・ニ・シ・テ・ナ」では、「勝手に言つてな」と悪態をつきたくもなる。文語訳「狭き門より入れ」(七・13)が蟹行の口語訳に変じて「狭い門より入りなさい」と来たのでは、「や・す・だよ」とひねくれ根性を起こすのも無理からぬ話であらう。

漢字の本来本元であつた中国も、ほぼハンゲル専用に切り換へた韓国も、今日では古典作品でさへ横書きが幅を利かせてゐる。ヴェトナムは、固有文字喃ナムなどはるか昔の夢物語、今やローマ字で綴る横書き一辺倒だ。かつて漢字文化圏を形成してゐた東アジアのなかで、なほも縦書きを固守してゐるのは、独り我が日本のみである。これが時代の趨勢に乗り遅れた頑迷固陋の旧套墨守にすぎないのか、それとも、孤塁を堅持せんとする文化的独立性の証明となるのか、いづれ遠からず決着がつくとだらう。おそらくは、教育家ならぬ教育屋たちが屁理屈をこねて音頭

を取り、図に乗つた文科省が一気に国語教科書の全面的な横書き化を図り、マスメディアがここを先途とばかりに追従するといふ例の戦後の国語国字改悪と同じ図式が再現されるのではなからうか。愚行には模倣者が付きものである。私はそのやうな節目の生き証人にならぬことを願つて已まない。